

花鳥餘情

五



第十三

初音
胡蝶

第十四

曇

第十五

常友
野分

舞火



僧正慈海

花鳥舒情第十三
道一初子

初子 明蝶

木
街
之
文
庫

以初再伺春名源氏廿六歳の正月の事とて
 仰り十七の年の羽衣の事とて廿七の年の道一とて
 仰り十八の年の事とて廿八の年の事とて廿九の年の事とて
 仰り三十の年の事とて三十一の年の事とて三十二の年の事とて
 仰り三十三の年の事とて三十四の年の事とて三十五の年の事とて
 仰り三十六の年の事とて三十七の年の事とて三十八の年の事とて
 仰り三十九の年の事とて四十の年の事とて四十一の年の事とて
 仰り四十二の年の事とて四十三の年の事とて四十四の年の事とて
 仰り四十五の年の事とて四十六の年の事とて四十七の年の事とて
 仰り四十八の年の事とて四十九の年の事とて五十の年の事とて
 仰り五十一の年の事とて五十二の年の事とて五十三の年の事とて
 仰り五十四の年の事とて五十五の年の事とて五十六の年の事とて
 仰り五十七の年の事とて五十八の年の事とて五十九の年の事とて
 仰り六十の年の事とて六十一の年の事とて六十二の年の事とて
 仰り六十三の年の事とて六十四の年の事とて六十五の年の事とて
 仰り六十六の年の事とて六十七の年の事とて六十八の年の事とて
 仰り六十九の年の事とて七十の年の事とて七十一の年の事とて
 仰り七十二の年の事とて七十三の年の事とて七十四の年の事とて
 仰り七十五の年の事とて七十六の年の事とて七十七の年の事とて
 仰り七十八の年の事とて七十九の年の事とて八十の年の事とて
 仰り八十一の年の事とて八十二の年の事とて八十三の年の事とて
 仰り八十四の年の事とて八十五の年の事とて八十六の年の事とて
 仰り八十七の年の事とて八十八の年の事とて八十九の年の事とて
 仰り九十の年の事とて九十一の年の事とて九十二の年の事とて
 仰り九十三の年の事とて九十四の年の事とて九十五の年の事とて
 仰り九十六の年の事とて九十七の年の事とて九十八の年の事とて
 仰り九十九の年の事とて百の年の事とて

花のうらやみなりは、ゆふはつゝのひかりを
とらへてまはさぬ花のうらやみなりは、ゆふ
はつゝのひかりを

おもしろきものなりと 花のうらやみなりは
ゆふはつゝのひかりを

えいせいなるものなりと 花のうらやみなりは
蒲陶のほろも、あはれなるものなり

おもしろきものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは

はつゝのひかりを 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは

はつゝのひかりを 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは
あはれなるものなりと 花のうらやみなりは

かたはるものなりと 花のうらやみなりは
唐東京錦首花のうらやみなりは、ゆふはつゝ
四方二寸許表裏^紅芳平縮^魚縁と 東白地錦素
京錦と

ろひかりのれ 衣被香エヒカウとけつ衣香エカウとみをく

衣香エカウ衣香エカウとく衣エははく心成抄シある者

和名抄ワナシ文字集モノ畧リョウ之ノ衣香エカウ意イ衣エ俗ソク云クニ衣エ此コ

庸香ユウカウす家ケ沈香シンカウ二分檀タン五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ五分ブツ

ちりこゝろをいふにちりこゝろのなは
り

いふにちりこゝろの有様もきき物ききり
ちりこゝろをいふにちりこゝろのなは
り
源中のちりこゝろのなはちりこゝろのなは
り
のなはちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
よゝろをいふにちりこゝろのなは

ちりこゝろのなはちりこゝろのなはち
り
源中のちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
のなはちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
よゝろをいふにちりこゝろのなは

ちりこゝろのなはちりこゝろのなはち
り
源中のちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
のなはちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
よゝろをいふにちりこゝろのなは

ちりこゝろのなはちりこゝろのなはち
り
源中のちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
のなはちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
よゝろをいふにちりこゝろのなは

ちりこゝろのなはちりこゝろのなはち

ちりこゝろのなはちりこゝろのなはち
り
源中のちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
のなはちりこゝろのなはちりこゝろのな
はり
よゝろをいふにちりこゝろのなは

末橋をいふに

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. There are several lines of text, with some words or characters highlighted in red ink. The text appears to be a personal communication or a formal document.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. There are several lines of text, with some words or characters highlighted in red ink. The text appears to be a personal communication or a formal document.

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

あまのりくはひて

つぎつぎとくわたりおぼくは
たぎりたぎりおぼくは

あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

しんいふらふ事ありし朝の首は月を
みりし京中の聖王^士月日事ありてありし
とるおらりてふい舞しりし事たる未
の代りし秋まゝのいふて送^送具はる
事ありし朝の餘風うりて院の天元六
年正月男踏うりてふ記福を
しも可身ありし或^或西より書文
なりし又ふりてわたりし後取れ東
の朝よりいふ多し又ふりて太めと
し付しりしあふりてふりし事
ありしりしあふりてふりし事
うりし事ありし

寺部^{寺部}記延長七年正月踏うり人踏うり西行東
行又西行朝^朝五代衣持取綿詞吹還入更入置^置津前
け度水驛^{唯進湯清}又用振器
同記^{同記}天曆五年正月十日春康子内親王所^所陪^陪麻
景^景以^以仍^仍初^初律^律侍女^{侍女}後^後設^設粥^粥食^食水^水驛^驛更^更詔^詔昭^昭陽
舍^舍設^設盤^盤饌^饌而^而水^水對^對座^座旬^旬旬^旬
同記^{同記}天曆四年正月十日春中官至^至于^于賜^賜粥^粥食^食用^用振^振器^器
水^水驛^驛又^又侍^侍院^院侍^侍酒^酒史^史上^上皇^皇還^還津^津後^後取^取踏^踏うり^畢賜^賜粥^粥食^食
旬^旬旬^旬
九^九系^系石^石系^系相^相記^記康^康平^平四^四年^年正^正月^月十^十日^日踏^踏うり^畢設^設驛^驛水^水驛^驛
被^被定^定し^中宮^宮飯^飯小^小宮^宮水^水今^今宮^宮飯^飯許^許大^大任^任宿^宿所^所飯^飯
石^石大^大任^任宿^宿所^所水^水大^大任^任宿^宿所^所飯^飯

と葉水むきよき男踏うのほいふ事
踏う人々舞食意下り酒或湯ひき
用ひき水驛とて事うら尚略する
又飯驛とて水驛とてりけりて舞食
意とては踏うの人々やと驛何
多とてりけり驛ははるるそ
あつりて人々の馬も水むき
み人の飯と食馬とてりけり
向向驛とてり酒着とてり用と水む
とてり舞食膳と用と飯驛とてり
又既牧令と水驛とてり舞食驛
とてり舞食とてり

あけふのさくもあつりてり

手部と記踏う人々衣冠舞塵用腕紀白
下籠衣着深赤持白杖西宮衣束抄と青也舞塵袍
白下籠衣束舞白石帯深緑綿花白杖

今案ころあけふと新以下とてり
舞食斗袋持との二人の舞紀と着とてり
白杖の舞人として舞持の舞意の舞鞋とてり

又中持の志うらりあつりてり
又舞うとてり舞とてり延長七年踏平左
中持伴衛方の志うらり右中持舞舞舞舞舞
例とてり

此の御記をよめぬもいふ事しとて
仰らるるまうらわいふ事由表はゆいま
物よりよるる事院しその事まれば祿の
こころをいふ事しとてまうらわいふ事
あはく事ありゆりあられり
いふ事しとてまうらわい
海軍の若くは中將とてまうらわい
まうらわいとてまうらわい

西宮を踏之月舞人起座唱万春楽
我皇延祚億代 万春楽 元正慶序年光 信長
と春万春末いよく八句の待てし御漢音

うらわいとてまうらわい万春末いよく
踏之月舞人起座唱万春楽
我皇延祚億代いよく
うらわいとてまうらわい

延喜踏歌圖

- 三ノ頭
- 三ノ頭
- 三ノ頭
- 三ノ頭
- 三ノ頭
- 三ノ頭

東階

舞人
持持書
新

舞人
舞人
舞人
舞人
舞人
舞人

征しうあつてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて
しほきそゆゆ神妙なりとてさうりてさうりてさうりてさ
らんと筆しめあつて或はつてさうりてさうりてさうりて
さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
あつてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
抄しうりてさうりて

道二明蝶

以何再新為春名初言の同年事とてさうりてさうりて
三月四月の事とてさうりてさうりてさうりてさうりて
あつてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
ほりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ

さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ

伴うりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ

舟の揺れまゝさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
かろ考らまゝさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
さうりてさ

し女もさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
女房もさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ

中交もさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ
さうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさ

申の世承くらり毎の...
 のは...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...

錦と鋪...
 ...
 ...

...

反音く...
 黄鐘調の...
 ...

...

...

...

あふ下り月へあはさしつゝらるる
ゆきつゝるる時

わさつれをこころはは 葉屋の草

たまふしあはららしと ち方中門の廊

とほ名の床屋しきさ

あふ 明床と日本靴をあふさふあふ

府さしつゝ海抄あやまら

あふ 中宮の女房達まはる

あふ 中宮の地蔵の信とけふあふ

あふ 馬のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

あふ 一種のあふあふ

さうしてのらあてはあはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

りうまう大和物種とていし
五律持る

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

あはれいしうきと縁
由のまじりあはれ

大なる花のうらさ^帖宿しき入明徳集の事
集にもあつたものなるは久しや^一
あつた事^一うらさ^一た^一た^一た^一た^一た^一た^一
よそのまきは^一た^一た^一た^一た^一た^一た^一
とつた^一ま^一ら^一ら^一ら^一ら^一ら^一ら^一

花鳥餘情分十句 量

道三帯

白鳥初春名海中央古殿の心は^一
の^一海^一

伊と^一わ^一の^一思^一の^一あ^一の^一あ^一
と^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一

人^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一
海^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一

信明集

新代^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一
あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一
あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一
あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一
あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一の^一あ^一

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. There are several instances of red ink used for initials or corrections, notably at the beginning of several lines and in the middle of others.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page. There are several instances of red ink used for initials or corrections, notably at the beginning of several lines and in the middle of others.

末額 古名不青近代 打懸接骨月并两面行晒更

欣瓦鞘等也又諸本騎射及雜藝未如衣束皆有別

色目更不律記又左右と未府打毬し軍裝束白

巾子冠黃紀靴等各持毬杖 延喜式凡五月之白

騎射官人と未惣十人並着深緑布紋錦甲コウ欣

白布帶横刀ウチ竹前行騰麻鞋 シ素袴射シ競

了とよと未おの装束不同競了ウチ打懸しウチお

と馬とウチ後ウチ装束ウチのウチ騎射ウチのウチ得衣

とウチ着ウチとウチ二ウチ一ウチ装束ウチのウチ騎射ウチのウチ馬

とウチ人ウチひウチらウチきウチとウチ一ウチ未ウチさウチとウチはウチくウチてウチのウチ競

るウチ未ウチ装束ウチのウチ事ウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

とウチ未ウチらウチとウチ申ウチてウチとウチとウチあウチれウチるウチ

藤石指取石として舞としては舞として
ほつ事あり如き事ありて保延四年八月定治
右府の記にたりて藤石指取石として新師子の
一有子二人面取大之指取の馬取之正業及舞人
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として

うらやまの藤石指取石としては舞として
かたがは藤石指取石としては舞として
し葉は藤石指取石としては舞として
りつとありては藤石指取石としては舞として
は木の藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として
とありては藤石指取石としては舞として

人うすゝのくはくわい

くめんくわいしんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡
おやまはくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

わんくわいしん唐の書簡

各別法の道理の煩悩と善徳とは異なる
 水と氷の如くは同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する
 善徳の煩悩は同一の性質を有する

まる丸い心 男女の通稱なり 又古くは丸い磨

の二字は月を指すなり 又丸い心は
 つくたぬ丸い心なり 又丸い心は
 丸い心なり 又丸い心は

ありては丸い心なり 又丸い心は

四十花嚴經十二之地神常言我負大地一切所
 有乃須弥山山以為重亦無厭心於三種人常厭
 倦不欲任持何等為之三者心懷叛逆謀害人等二
 念之業息親不孝又母之撥無困果毀節之室破輪
 偈如是三人我慈惠尊重乃至一念不欲任持
 心地觀經才二之世間之恩有甚四種一父母恩二衆
 生恩三國王恩四三寶恩如是回恩一切衆生平等

こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
わねのあし
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相
こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相
こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相

こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相
こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相
こころわねはるるがう源守相^字と孫らう太大将
まふま中御もまふま上野交清いといはれ
乃んてりまふま孫はまふまふまふま将^{此交清}源守相

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

向
 友
 信
 大
 女
 書
 加
 行
 文
 氏
 世
 結
 今
 又
 氏
 世
 結
 今
 又
 氏
 世
 結
 今

想の行

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

名を以てしるすはすまふりてはるるを以てしるす
難産 胎錫 食經云 難音 夷 和名 伊師 布之 和名 抄
和名之難音 夷 和名 伊師 布之性 伏沈 在石間者之

い水やて 和名よまそりてはるるを以てしるす

いさるるを以てしるすはるるを以てしるす

よてていひてはるるを以てしるす

しるるに ころろ十二宮中なるまがきおるら

はるるに してはるるを以てしるす

しるるに せはるるを以てしるす

しるるに せはるるを以てしるす

しるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

母少将とよしん

申持のまもころりてはるるを以てしるす

極よらりの事よまかてはるるを以てしるす

きねらりはんはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

はるるに せはるるを以てしるす

くそくねけさうあもてんやとせん

こころはさうもて我家の物なりしとて

こころの住はしとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて
いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて
いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて
いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

いふ事清くはしめしとてあつちもあつちとて

寛平法皇貴拾芥
重師
多法
師
目
朽

又杉女或字多乃法師

唐の書に想文講

Handwritten cursive script on the left page, consisting of approximately 12 lines of text.

Handwritten cursive script on the right page, consisting of approximately 12 lines of text.

おきりしむにむしおとすきんかきし
おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

おきりしむにむしおとすきんかきし

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

まゝ申行を

かゝる事の中持れん事...
あつて...
しる...
あつて...
しる...

は...
は...
は...

か...
か...
か...
か...
か...

まゝ...
ま...

て...
て...

ぬ...
ぬ...
ぬ...

は...
は...
は...

は...
は...
は...

わ...
わ...

承和九年十二月廿七日格之妙法華經寂勝王經
經別一人毎年^{ニテ}駐^ル度^ノ通^ル業^各在^道江^國妙^法華
并^寂勝^等等^其試^定者^始從^序品^書令^誦誦
今^案之^云云^と了^すて^去り^ぬ妙^法華^經の^大徳^を

らるるあまのよき

あつたきよきあつた

木多はり木

まはのあまのよき
あまのよきあまのよき

格違ぬあまのよき

あまのよきあまのよき

まはのあまのよき

又まはのあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

謙徳のあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

杜詩云八月秋分風怒號

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

あまのよきあまのよき

おとすゝめおとすゝめおとすゝめ

おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ

おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ

おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ

花文後、有花文、後、謝志、連詩、云、客後、諸、方、
来、遣、我、鶴、文、後、と、同、心、或、託、頭、文、後、と、同、心、也、
又、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、
信、文、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、
又、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、
又、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、い、つ、つ、ふ、と、

おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ

おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ
おとすゝめおとすゝめおとすゝめおとすゝめ

いづれかの道にあらむ
ふたつとていふまじき
もよほしきまじき
凡そまじきまじき
明るまじきまじき
乃下れまじきまじき

俗名増島彦師道室秀夏記念

